

令和 3 年 4 月 27 日現在

機関番号：37104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10961

研究課題名(和文) 運動部活動における不適応生徒の予防的指導のための尺度の開発

研究課題名(英文) A study on basic psychological need satisfactions and frustrations as an index of subjective adjustment to school sport club

研究代表者

伊藤 豊彦 (Ito, Toyohiko)

久留米大学・その他部局等・教授

研究者番号：20144686

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、運動部活動における心理欲求の充足・不満が適応感に及ぼす影響を検討することであった。大学運動部員83名を対象に、心理欲求の充足と不満(計6下位尺度)と居心地のよさの感覚、課題・目的の存在、被信頼・受容感、および劣等感のなさの4下位尺度からなる適応感を測定した。適応感を目的変数、心理欲求を説明変数とした重回帰分析の結果、心理欲求の充足・不満は適応感と密接な関連が示されたことから、心理欲求の充足・不満尺度は、運動部活動指導の改善・充実のみならず、不適応予防のための有益なツールであることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、運動部活動における心理欲求の充足・不満が運動部活動への適応感と密接に関連していることが示されたことから、運動部活動における心理欲求の充足・不満の程度を把握することは、運動部活動の指導の改善と充実を図るうえでの有益な一指標となりうることが示唆された。さらに、「低充足・高不満群」は、運動部活動に対して不適応の可能性が考えられることから、これまで、見当たらなかった運動部活動における不適応への予防のための新たなツールを提供するという意味で意義あるものと思われる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the effects of basic psychological need satisfactions and frustrations on subjective adjustment to school sport clubs in college student. Eighty-three college students were assessed the basic psychological need satisfaction and frustration scale and the subjective adjustment to school sport clubs. Multiple regression analyses showed that psychological need satisfactions were positively correlated with, and psychological need frustrations were negatively correlated with subjective adjustment. In addition, ANOVA showed that students who have low need satisfaction and high need frustration had the lowest scores on the subjective adjustment scale. These findings revealed that basic psychological need satisfaction and frustration played a vital role in adjustment to sport club. Therefore, regular monitoring of their levels would be useful for preventing maladjustment and improving and enhancing of school sports coaching.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：運動部指導の改善と充実 不適応予防 自己決定理論 基本的心理欲求 適応感

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)運動部活動の教育的意義と問題点：中学校や高等学校で多くの生徒が参加している運動部活動は生徒の心身にわたる成長と豊かな学校生活の実現に大きな役割を果たし、様々な成果をもたらしてきた。しかしながらその一方で、これまでの運動部活動に関しては、人間教育の名のもとに行われる「体罰」や「しごき」、運動部活動特有の「封建的な人間関係」の存在、「勝利至上主義」を背景とした過熱といった問題がしばしば指摘されてきた（小野・庄司，2015）。さらに、2012年12月には、顧問の教員の体罰を背景として高校生が自らの命を絶つという痛ましい事案が発生し、運動部活動指導の改善は喫緊の課題となっている。

(2)運動部活動の指導を取り巻く状況：このような運動部活動の指導のあり方に関する問題に関連して、文部科学省（2008）は学習指導要領において学校教育の一環である部活動の意義と留意点を初めて規定するとともに、「運動部の在り方に関する調査協力者会議（2013）」などを相次いで立ち上げ、運動部活動での指導のガイドラインや指導者の資質向上に向けた提言を行っている。また、日本体育学会では「指導者育成・資格特別委員会」が設置され、指導者育成のためのプログラム開発や日本体育協会と連携した新たなスポーツ指導者資格制度の導入が検討されている。これらの取り組みは、その必要性から早急に取り組むべき課題であると考えられるが、それらが成果を上げるためには、一定の時間が必要である。

(3)運動部活動の指導に関連する学術研究の動向：スポーツ心理学の研究領域では、これまで、運動部活動の継続・退部やバーンアウトなどのテーマのもとに、それらの原因の把握や指導の改善に資する一定の知見を蓄積してきた。しかし、運動部の実態を把握し、問題の原因を解明し、指導者教育に生かすという従来のアプローチでは、部活動指導者に対する情報提供や指導者教育という視点から一定の効果が期待できるものの、今現在、運動部活動に参加している生徒が抱える様々な問題を早期に発見し、支援するという実践的な課題に対しては限界がある。一方、教育場面では、「いじめ被害・学級不適応児童発見尺度（河村・田上，1997）」において現在の学校生活での意欲や満足感を問うことで、“間接的”にいじめ被害や不登校の可能性を測定する尺度（学校生活満足度尺度）が開発され、予防的指導に効果を上げているという事実がある。

それ故、運動部活動指導の改善や充実を図るとともに、運動部活動への不適応を予防するためには、教育成果の向上のみならず、生徒理解や不適応の可能性を早期に発見し、支援することが求められており、そのための何らかの手がかりが必要とされる。

(4)実践場面に求められる測定の要件：しかしながら、以上のような運動部活動指導の改善・充実を図るための実態把握は必ずしも容易なことではない。たとえば、河村・田上（1997）は、児童のいじめ被害や学級不適応傾向の可能性を発見できる「児童の学級満足度尺度」を作成する際、実際に調査を実施する小学校教諭から、児童に抵抗を起こさせない間接的な内容であることや教師の実践内容や学級の善し悪しを児童に評価させる内容でないことなどの要望を得ている。すなわち、いじめ被害や登校拒否の可能性を直接問いたす内容では、児童に抵抗を感じさせる可能性が高く、実態を把握することがむずかしいこと、また、教師の実践力を児童に評価させる内容では、児童のみならず、調査を実施する教師自身の抵抗を生み、実際に活用されにくいことが危惧されるのである。さらに、調査の実施が普段の教師の仕事に過重な負担にならないことに加え、調査結果が明日からの教育実践に直接活かすことができる具体的な方針を示唆することが望まれる。

特に、調査を実施する教師自身の心理的抵抗に対する配慮の必要性に関しては、スポーツ心理学の領域においても同様であり、研究者の作成する尺度項目が指導者を評価する内容で構成されていることが調査に対する協力が得られにくい原因の1つとなり、結果として、研究者の取り組みと現場のニーズが乖離していることを指摘した藤田(2013)からも窺える。それゆえ、このような指摘は、運動部活動指導の改善と充実という実践的な問題に取り組む場合に考慮すべき、極めて重要な課題であると考えられるにもかかわらず、これまで十分に検討されてこなかった。

(5)本研究の背景となる動機づけの自己決定理論：ところで、動機づけの自己決定理論の下位理論の1つである基本的心理欲求理論(Ryan and Deci, 2017)では、自律性、関係性、有能さへの3つの欲求充足が人の成長や well-being に欠かせないことを指摘し、動機づけのみならず、適応や精神的健康に影響することを明らかにしてきた。さらに、これらの心理欲求の充足と不満は、指導者などの文脈における欲求支援・阻害行動などによって左右されることも明らかにされている(肖・外山, 2019)。

このように、心理欲求の充足は動機づけを高めるのみならず、学校生活への適応や well-being を規定する重要な要因であることが明らかであるが、運動部活動指導の改善・充実を図る目的で生徒の基本的心理欲求の充足・不満の程度を把握することは、直接生徒に指導の評価を求めないという意味で心理的抵抗が少ないという利点があり、かつ、生徒が運動部活動に取り組むうえで出会うさまざまな問題や不適応の状況し、それに基づいた改善を行うための有益な情報となることが期待できる。

2. 研究の目的

本研究は、運動部活動に参加する生徒が抱える問題を早期に発見し、その対応を図るためのアセスメントツールを作成するという従来にない新たな試みを通して、運動部活動において生徒が抱える問題の早期発見や問題発生の予防に貢献することを目指すものであり、運動部活動指導者への有益な情報提供を通して、運動部活動の教育的意義をさらに高めていくことが期待できる。

そこで本研究では、運動部活動の指導の改善に資するために、動機づけの自己決定理論の立場から、心理欲求の充足と不満を取り上げ、大学運動部員を対象に、運動部活動における適応感との関連を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)調査協力者と調査時期：調査協力者は、九州地区の大学で運動部に所属する大学生 83 名(男子 52 名、女子 31 名)であった。また、調査は、2019 年 10 月から 12 月上旬にかけて実施された。

(2)調査内容： 基本的心理欲求の充足と不満 運動部活動における基本的心理欲求の充足と不満を測定するため、Nishimura and Suzuki (2016) によって作成された The Japanese Version of the Basic Psychological Need Satisfaction and Need Frustration Scale (BPNSFS) を使用した。この尺度は、自律性への欲求充足、自律性への欲求不満、関係性への欲求充足、関係性への欲求不満、有能さへの欲求充足、および有能さへの欲求不満の 6 つの下位尺度、各 4 項目、計 24 項目から構成される。回答形式は、5 件法である。

適応感 運動部活動への適応状態を測定するために、大久保(2005)が作成した適応感尺度を使用した。この尺度は、個人が環境と適合している時の感覚を測定する尺度で、居心地のよさの感覚、課題・目的の存在、被信頼・受容感、および劣等感のなさの 4 つの下位尺度、計 30 項目から構成される。回答形式は、5 件法である。

なお、本研究では、両尺度ともに、各質問項目の文頭に「部活動では」という文を付け加えた。また、尺度の使用に関しては、質問項目の加筆修正も含め両著者より承諾を得た。

(3)調査手続きと倫理的配慮：授業時間などを通して、調査協力への依頼を承諾した協力者に、調査票を配布し、個別に提出するよう依頼した。調査票には、調査への参加は任意であり、不参加による不利益は生じないこと、調査への回答は匿名であり回答内容はすべて統計的に処理されるため、個人の情報や回答内容が特定されないこと、調査結果を研究目的以外には使用しないこと、回答には、正解、不正解はないこと、答えたくない質問があった場合は答えなくてもよいこと、などを明記し、調査に協力することに同意を得た。なお、研究の実施にあたっては、本学の研究倫理委員会の承認（研究番号 372）を得た。

(4) 統計処理：結果の処理は、すべて IBM SPSS Statistics ver.26.0 を使用した。

4 . 研究成果

(1) 心理欲求の充足・不満と適応感との関連について：運動部活動における基本的心理欲求の充足・不満と適応感との関連を検討するために、4 つの適応感下位尺度を目的変数、6 つの基本的心理欲求下位尺度を説明変数とした重回帰分析を行った（表 3）。

表3 基本的心理欲求の充足・不満から適応感を予測した結果

	適応感												VIF
	居心地のよさの感覚			課題・目的の存在			被信頼・受容感			劣等感のなさ			
	β	t(76)	p	β	t(76)	p	β	t(76)	p	β	t(76)	p	
自律性への欲求充足	.187	1.631	.107	.416 **	3.147	.002	-.099	-.668	.506	.005	.045	.964	2.441
自律性への欲求不満	-.187 *	-1.997	.049	-.185	-1.715	.090	-.016	-.132	.895	-.291 **	-2.975	.004	1.635
関係性への欲求充足	.337 **	3.281	.002	.125	1.057	.294	.183	1.375	.173	.156	1.461	.148	1.963
関係性への欲求不満	-.204 *	-2.099	.039	-.147	-1.310	.194	-.031	-.242	.809	-.262 *	-2.591	.011	1.760
有能さへの欲求充足	.210 *	2.276	.026	.103	.967	.337	.465 ***	3.888	<.001	.174	1.816	.073	1.575
有能さへの欲求不満	-.025	-.300	.765	.065	.668	.506	-.111	-1.008	.316	-.287 **	-3.257	.002	1.326
R^2 (調整済み R^2)	.591(.559)			.457(.414)			.310(.256)			.557(.522)			
F(6,76)	18.309 ***			10.65 ***			5.701 ***			15.8 ***			<.001

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表 3 より、下位尺度別に標準偏回帰係数を見ると、まず、「居心地のよさの感覚」では、関係性と有能さの欲求充足に正の、関係性と自律性の欲求不満には負の係数が認められた。競技に自信があり仲間との関係が良いと居心地がよいが、選んでないことをやらされていると感じたり、仲間との関係が悪いと居心地が悪くなることを示している。「課題・目的の存在」では、自律性への欲求充足のみに正の係数が認められ、運動部でやりたいことを自由に選べていると感じると課題や目的の存在による充実感が生じることが示唆される。「被信頼・受容感」は、有能さへの欲求充足のみに有意な係数が認められ、部活に自信があるときに他者から信頼され受容されているという感覚が増すことが窺える。最後に、「劣等感のなさ」では、自律性・関係性・有能さの 3 つの欲求不満が、有意な負の係数を示していた。自分に自信がなく、仲間との関係がぎくしゃくし、やりたくないことをやらされていると感じると劣等感を感じる傾向が高いことが示唆される。

(2)心理欲求の充足・不満類型と適応感との関連について：心理欲求の充足と不満に基づく一人ひとりの部員の理解や支援を進める場合、そのタイプや類型を把握し、個人差に応じた指導の方針や計画を立てることが必要である。そこで、まず、3 つの欲求充足下位尺度得点を合計した欲求充足得点と 3 つの欲求不満下位尺度得点を合計した欲求不満得点を算出し、平均値に基づいて、高充足・高不満群、高充足・低不満群、低充足・高不満群、および低充足・低不満群の 4 群に分類した。

つぎに、4 群別に 4 つの適応感下位尺度得点を算出し、それぞれ充足・不満類型を要因とする 1 要因分散分析を行った。その結果、表 4 より、すべての適応感下位尺度得点で有意差が認められ、効果量も大きか

表4 心理欲求の充足・不満類型別にみた適応感下位尺度得点の平均値と標準偏差、および分散分析結果と効果量 (η_p^2)

	心理欲求の充足・不満類型								F (3,79)	p	η_p^2
	高充足・高不満群		高充足・低不満群		低充足・高不満群		低充足・低不満群				
	(n=9)		(n=33)		(n=28)		(n=13)				
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
居心地のよさの感覚	42.7 ^{ab}	6.26	47.1 ^a	5.89	35.5 ^c	5.16	41.5 ^b	4.44	22.37	<.001	.459
課題・目的の存在	28.2 ^{ab}	4.27	31.7 ^a	3.38	25.7 ^b	3.66	27.2 ^b	5.10	12.98	<.001	.330
被信頼・受容感	22.9 ^a	3.62	22.6 ^a	4.09	19.2 ^{ab}	4.98	18.3 ^b	2.81	5.58	.002	.175
劣等感のなさ	19.6 ^{bc}	2.19	23.8 ^a	3.94	17.5 ^c	3.16	21.8 ^{ab}	2.20	18.82	<.001	.417

†平均値の右肩のアルファベット記号は、適応感下位尺度ごとの多重比較 (Tukey HSD法) の結果を表し、同じ記号同士の群は、5%水準で同じグループを形成している (有意差がない) ことを示す。

つたため、Tukey の HSD 法による多重比較を行った。

多重比較の結果から、「高充足・低不満群」の適応感が最も高く、「高充足・高不満群」、「低充足・低不満群」がこれに続き、「低充足・高不満群」の適応感が最も低い傾向にあることが示された。このことから、運動部活動への適応感を高めるためには、一人一人の部員の欲求不満を抑制しつつ、欲求充足を高めることが重要であり、とりわけ、「低充足・高不満群」への支援が求められると考えられる。

(3)指導実践への示唆：本研究では、運動部活動における心理欲求の充足と不満が適応感と密接な関係にあることが示されたことから、運動部活動における心理欲求の充足と不満の把握は、運動部活動指導の改善と充実のための有益な手がかりの1つを提供するものと考えられる。したがって、運動部活動の指導に携わる教員や外部指導者が定期的にそれらの情報と分析を共有することで、運動部活動における様々な問題の予防のみならず、指導の方針や計画を立てるための有益な情報を提供することが期待できる。特に、「低充足・高不満群」の適応感得点が最も低いことから、二次的心理教育的援助サービスの対象として、これらの特徴を示す部員に対して、まずは欲求不満の原因を取り除き、欲求を充足させるための支援や援助が必要と考えられる。

最後に、本研究では、大学生のみを対象としていることから、本研究結果の一般化には一定の限界がある。また、心理欲求の充足・不満と適応感との静的な関連を検討したに過ぎない。したがって、本研究結果に基づき、心理教育的援助サービスを必要とする部員を特定し、様々な支援を通して改善を図るといった実践的な取り組みが必要であろう。これらのことを今後の課題としたい。

<主な引用文献>

藤田 勉 (2013) スポーツにおける動機づけ雰囲気. スポーツ心理学研究, 40: 185-192.

河村茂雄・田上不二夫 (1997) いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成. カウンセリング研究, 30: 112-120.

Nishimura, T. and Suzuki, T. (2016) Basic psychological need satisfaction and frustration in Japan: Controlling for the big five personality trait. *Japanese Psychological Research*, 58: 320-331.

大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因 - 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 - . 教育心理学研究, 53: 307-319.

Ryan, R. M. and Deci, E. L. (2017) *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development and wellness*. New York: The Guilford Press.

肖 雨知・外山美樹 (2019) Interpersonal Behaviors Questionnaire-self (IBQs-J)の日本語版の開発及び妥当性の検討. 筑波大学心理学研究, 57: 21-28.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊藤豊彦
2. 発表標題 大学運動部員における基本的心理欲求の充足・不満と適応感との関係
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第47回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------